【102】

氏　名（本　籍）	北村明彦（鳥取県）
学位の種類	医　学　博　士
学位記番号	博甲第686号
学位授与年月日	平成元年3月25日
学位授与の要件	学位規則第5条第1項該当
審査研究科	医学研究科
学位論文題目	脳梗塞の発生状況と発生要因に関する疫学研究 ー秋田農村における25年間の追跡調査成績の検討ー part 1　脳梗塞の発生率の推移とその発生要因の変遷 part 2　心房細動の有所見率・発生率の推移とその発生要因 （dissertation 形式）

主　査	筑波大学教授	医学博士	山口誠哉
副　査	筑波大学教授	医学博士	堀原一
副　査	筑波大学教授	医学博士	本村幸子
副　査	筑波大学教授	医学博士	能勢忠男
副　査	筑波大学助教授	医学博士	藤井敬二

論　文　の　要　旨

《目　的》

1960年代に入り脳出血の死亡率は，40歳以上の各年令層を通じて急速に減少してきたが，脳梗塞の死亡率はその減少度が脳出血に比し低率である。特に70歳以上の脈梗塞の死亡率は1970年代まで増加傾向を示し，その後増加傾向は抑えられたものの，現在においてもなお明らかな減少を認めていない。この理由の1つとして脳梗塞の発生要因が疫学的に未だ十分に解明されておらず，そのため効率的な脳梗塞予防対策を講ずることが困難であることが挙げられる。

本研究では，従来より脳卒中多発地域の一つであった秋田農村地域の最近20年間の疫学調査成績を検討し，脳卒中の病型別発生状況の推移と，それに伴う脳梗塞の発生要因を明確にすることを目的とした。

《方法ならびに結果》

対象地域は，秋田県南秋田郡井川町と本荘市石沢地区である。脳卒中の発生調査は，1964年以来毎年当地区の30歳以上の全住民を対象に実施している。発生調査法は厚生省研究班方式でおこない，脳卒中の判定，病型診断は文部省研究班で定められた基準に従った。脳卒中発生推移はおよそ5年毎にまとめ，1964年から1984年を4期にわけて検討した。脳梗塞のリスクファクターの分析を行うにあたっては，1963～1966年（前期），1972～1975年（後期）の2つの期間に40～69歳の全住民を対

象に悉皆的に検診を実施し，検診受診者から成る観察コホートを設定した。前期のコホートは，1974年まで，後期のコホートは1984年まで追跡した。分析は検診受診者をリスクファクターと考えられる要因を有する群と要因を有しない群に分類し，各群からの脳梗塞の性，年令補正相対危険度及び母集団寄与危険率を求めた。要因は，高血圧，眼底異常，心電図 ST-T 異常，心電図左室肥大所見，心房細動，高コレステロール血症，肥満，尿糖陽性，尿蛋白陽性とした。

脳卒中の発生数，推移については男女とも40～59歳及び60～69歳の年令層では脳出血脳梗塞のいずれの病型においても発生率は，1964～1968年から1979～1984年にかけて減少している。70歳以上においては脳出血の発生率は，1964～1968から1979－1984年の間で男子で90％，女子で73％の減少を認めたものの脳梗塞の発生率は男女とも増加傾向を示した。

脳梗塞発生に対する各要因の性年令補正相対危険度は，前期コホートにおいて高血圧，眼底異常，ST-T 異常に関して高い値を示し，後期コホートにおいては高血圧，眼底異常、ST-T 異常，左室肥大，心房細動，尿蛋白陽性の各要因が有意に高い相対危険度を示した。高コレステロール血症，肥満，尿糖陽性の相対危険度は前期，後期のいずれのコホートにおいても有意ではなかった。

審　査　の　要　旨

多数の標本につき長期間の疫学的追跡調査を行い，多くの危険要因の重みの選別に成功している。コホート調査については調査方法の一貫性が重視されるが，この研究においても調査法，精度の統一をはかっており研究結果の妥当性も高いということが出来る。

よって，著者は医学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。